

# 海龍王寺



海龍王寺山門（市・文）と十一面観音菩薩立像（国・重文）

前号の特集で取材した薬師寺の大谷徹装様にご紹介をいただき、今号は幾多の時代や戦乱の波に吞まれながらも、奈良時代の面影を色濃く残す、歴史ある古刹・海龍王寺を訪ねました。

**飛鳥時代は隅寺として親しまれ  
光明皇后によって創建**

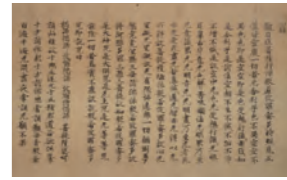
平城京の東二坊大路に位置する海龍王寺の山門は、幹線道路沿いに建っていました。その門をくぐると細長い参道が続き、そこには、先ほどまでの喧騒とは打って変わった凜とした空気が漂っています。右手に土と瓦で造られた築地塀、参道には木々が生い茂り、この先にお寺があるのかと思うほどの静けさです。境内に入ると草木の先に見えたのは、ひっそりと佇むお堂。それが国指定重要文化財・西金堂でした。

海龍王寺は天平三（七三二）年、光明皇后によって創建されましたが、飛鳥時代からすでにこの地にお寺があったと言われています。昭和四十年に発掘調査をした時、海龍王寺の敷地から飛鳥時代の瓦や建物の柱の跡が出てきたそうです。

「古墳などを造るのに長けていた土師氏の氏寺ではなかったかと言われています。ですから、平城京が出来る以前からこの地に海龍王寺の前身寺院があったのです」と話してくださったのは、ご住職の石川重元さん。平城京の東北隅にあったことか



参道



隅寺心経（市・文）

ら「隅寺」と呼ばれた飛鳥時代から続く海龍王寺は、奈良の数あるお寺の中でも、ひととき古い歴史を刻んでいます。

**玄昉が海難を逃れたことから  
遣唐使の航海安全祈願の寺に**

海龍王寺の初代住職玄昉は、住職になる以前の七三四年に唐を出発した時、大嵐に遭遇し、命からがら七三五年に帰国しました。大嵐の中で海龍王経を唱えて難を逃れたことから、隅寺と呼ばれていた寺の名前を聖武天皇が海龍王寺と定め、玄昉が住職となったのです。

海龍王寺としての歴史を歩み始めると、遣唐使の航海安全祈願や宮中における内道場での仏教講義、さらに聖武天皇と光明皇后のために祈るお寺として栄えていきました。また、般若心経を広めることが熱心だった玄昉が、海龍王寺で聖武天皇、光明皇后と、朝晩、般若心経を唱えたといういわれも残っているそうです。

「玄昉和尚が唐の最先端の仏教を持ち帰ったので、最先端の仏教がここに集まっているということでも栄えていったのでしょ」と話す、ご住職。しかし、平安時代に入り都が平安京に遷ると同時に、衰退していったのです。

**鎌倉時代仏教芸術の粋を集めた  
精緻な十一面観音菩薩立像**

鎌倉時代に入り、真言律宗を興した興正菩薩が住職になると、海龍王寺は再び栄えていきます。興正菩薩が戒律の道場や教学の研鑽をする場所として人を集めただけでなく、仏像や建物の復興にも力を注ぎました。

重要文化財に指定されているご本尊の十一面観音菩薩立像も、叡尊による復興の中で造立されました。鎌倉時代末期に造られたもので、昭和二十八年までは秘仏になっていました。後世になり一部修復されていますが、ほぼオリジナルの状態を保っています。高さ一メートルほどの小さな立像ですが、腰から下の衣は金箔を線にした截金の技法をふんだんに使い、銅製の頭飾や装身具には鍍金を施し、垂飾りは瓔珞や小さなガラス玉で綴られています。その精



十一面観音菩薩立像（左）。通常は、幕を下ろしてある（右）。

緻な細工は、まさに鎌倉時代の仏教芸術の粋を集めた仏像と言えます。

「十一面観音様の前に立たせて頂くと、七百年前にこのような仏像を造ろうと思われた方の感性の豊かさをいつも感じます。拝観される皆様も、お厨子の前まで進んで截金や装身具の状態を見ながら拝んで頂ければと思います。

ただ、撮影はご遠慮頂いています。自分一人ぐらいいいだろうと思われるかもしれませんが、ピントを合わす光が当たるだけでも仏様にはダメージになります。今の綺麗な状態を後世に残していくためにも、皆様も協力して拝観して頂ければと思います」

鎌倉時代からの歴史を刻む貴重な仏像を後世に残す義務が現代人にはある、と石川住職は熱く語ります。奈良時代前期に造られた国宝・五重小塔、それを納めている重要文化財の西金堂、文殊菩薩像なども叡尊によって解体修理や新たな造立がなされています。



石川重元住職



文殊菩薩像（国・重文）



境内、左：西金堂（国・重文）、右：本堂（市・文）



五重小塔（国宝）



五重小塔が納めてある西金堂



経堂（国・重文）

**幾多もの動乱の時代を経て  
奇跡的に残った建造物**

鎌倉時代に栄えた海龍王寺は、室町時代の応仁の乱によって、再び荒廃します。「このお寺が陣屋代わりになったことで、教典なども引き裂かれた状態になってしまいい、そこからお寺は荒廃の一途をたどったそうです」

江戸時代になると徳川幕府から知行百石を受け、海龍王寺は再び復興します。この時期に修復された建造物なども多く、本堂もその時期に修復されています。

しかし明治時代に廃仏毀釈となり、海龍王寺も他のお寺同様に大きな打撃を受けました。創建当時は西金堂と同様に、東金堂にも五重小塔があったといわれていますが、東金堂と五重小塔は廃仏毀釈の時に喪失しています。

「私の祖父が海龍王寺の住職として昭和二十八年に来たときは、お寺はかなり荒れていたそうです。本堂なども雨漏りがしたので、祖父自ら屋根に上って瓦の修理をした、と言っていました」

祖父の時代に西金堂や経蔵の解体修理を実施し、防災設備の工事を行いました。このお寺は様々な時代の波に吞まれてきましたが、奈良時代の建物が残っているのは奇跡的だと思いますね。五重小塔と西金堂は、今では平城宮の中に残っている奈良時代の唯一の建造物なので、厳重に守つていかなくてはいけないと思っています」

ご住職は、話されていました。